

英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み

—2年次報告—

工藤洋路・鈴木彩子・日基滋之・松本博文

要 約

本論文は、英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーを洗い出し、Can-do リストの形で具体化する共同研究の第2年次報告である。玉川大学文学部英語教育学科は2015年4月に開設され、英語教員養成に特化したコースを設け質の高い教員を育成することを目指している。このコースにおいてどのような知識・能力を教員を志す学生が獲得し、実践に活用できるようにすべきかを検討する研究の2年次である本年度は、本学科の2年生の英語教員養成コースの学生を対象に留学直前のアンケート調査を行い、学生自身が兼ね備えていると判断する英語力や英語指導力、そして英語観などを抽出し、今後の本学科の英語教職課程のプログラムの検証および改善に資するものとする。

キーワード：英語教員養成、カリキュラム、英語観、教師 Can-do、海外留学

1 はじめに

日本の小・中・高の英語教育は、2020年に控える東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、大きな変化を迎えようとしている。現行の学習指導要領のもとでは、小学校5、6年生は週1回、外国語活動を実施しているが、2020年度に全面实施を予定している次期学習指導要領では、外国語活動を3、4年生に前倒して、5、6年生は英語を教科化することになっている。また、中央教育審議会の教育課程企画特別部会（2016年8月1日）の資料（「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント」）によると、小学校のみならず、中高段階を含めた全教科にわたって、「アクティブ・ラーニング」の視点から学習過程を質的に改善することが次期教育課程では求められる。このように、学習指導要領が、学習内容だけではなく、その学習方法にまで言及をするという点は注目すべきであるが、アクティブ・ラーニングを用いる中で、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」へと児童・生徒を導いていくことが、今後の教育の重要な点となってくる。

こうした「学び」の質の変革とも言うべき状況が迫りつつあることを受けて、文部科学省の委託事業として、2015年度に「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」が開始され、小・中・高等学校の教職課程におけるコア・カリキュラムの構築を目指した調査研究が行われている。この事業の平成27年度の報告書（東京学芸大学、2016）の中で、小中高の各段階における「コア・カリキュラム（試案）」が提示されており、大学における教員養成課程で育成すべき能力や資質を明らかにした上で、それらを培うべきカリキュラムが提案されている。例えば、「教科に関する科目」は現行の養成課程においては、「英語学」「英米文学」「英語コミュニケーション」「異文化理解」の4つのカテゴリーに分けられているが、この試案では、その編成が「英語コミュニケーション」「英語学」「異文化理解・文学」の3つに縮約されている。さらに、この領域内で扱うべき事項として、例えば、「英語学」や「文学」に関しては、次のような提案が見られる。

英語学や文学を学ぶことは必要。ただし、「英語教育に資する」という観点からの教授内容には充分になっていない現状がある。文学・語学の授業で扱う内容について、コア・カリキュラムにおいて具体的な提案が求められる。(p. 214)

「言語学」や「文学」については、すでに一部の教員養成系の大学の授業において、「英語学と英語教育」や「英文学と教材研究」など、英語教育やコミュニケーションと関連させた授業設定をしているケースもあることが同報告書では紹介されているが、今後の教員養成課程では、全ての授業が、英語教育に何らかの形で資することが求められることになるかと予測できる。つまり、このコア・カリキュラムを実践するにあたっては、各大学の英語教員養成課程において、各授業間が有機的に繋がるように授業設計を行い、教職課程に属する学生の能力や資質を効果的に伸ばしていくことが求められることになる。

この課程の中では、英語の授業における指導技術を獲得することは勿論、同時に、その指導技術の前提となる英語能力の養成もこれまで以上に実践していく必要がある。「英語教員に求められる英語力」は、2013年6月14日に閣議決定した『教育振興基本計画』において、英検準一級、TOEFL iBT80点、TOEIC730点以上と設定されており、全国の公立高校においては75%、公立中学では50%の英語教員がそれぞれ、この能力水準に到達することを目標としている。しかしながら、「平成27年度 公立中学校・中等教育学校（前期課程）における英語教育実施状況調査」（文部科学省、2015）および「平成27年度 公立高等学校・中等教育学校（後期課程）における英語教育実施状況調査」（文部科学省、2015）によれば、この水準に到達した教員の割合は、高校で57.3%、中学校では30.2%と目標値とは20%近くの差があることが分かった。大学での教員養成課程においては、「教科に関する科目」の「英語コミュニケーション」として開講されている科目が、英語力を育成する主たる科目として位置づけられている場合が多いと思われるが、これらの科目だけではなく、「教職に関する科目（英語科の指導法）」や、

「英語学」「英米文学」「異文化理解」といったその他の「教科に関する科目」と併せて、総合的に英語力を養成していくカリキュラムが今後より一層求められることになる。

このような英語教員養成課程のこれからの在り方を見据えて、本大学の文学部では、中高の英語教員を養成するためのより良い教育課程を実践するために、2015年度より「英語教育学科 英語教員養成コース」を開設し、卒業要件として2セメスターの海外留学を設定するなど、高度な英語力と高い英語の指導技術等を兼ね備えた教員の養成を目標としたカリキュラムをスタートさせた。それと並行して、同年度に本研究の前段階となる1年目の共同研究を開始し、その成果を「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み—初年次報告—」（鈴木、工藤、日碁、松本、2016）として公表した。本研究はこの2年目の研究にあたり、その主たる目的は、「英語教育学科 英語教員養成コース」の第1期生の留学直前（2016年8月：第3セメスター終了時点）の時点での、能力や意識を明らかにするための調査を行うことである。対象となる学生は、第3セメスター終了時までには、英語および教員免許状（中学校・高等学校第1種：英語）に関わる授業として、概ね以下のものを履修してきている（括弧内の数字は単位数）。大学に入学してから1年半の期間しか経過していないため、英語の指導技術や指導の理論に関する授業はまだ履修していない。一方、「英語コミュニケーション」に該当する英語力を育成するための授業の単位数は比較的多いことから、英語の学習者としての経験値は上がっており、そこで様々な学習を自律的に行っていれば、学習者の視点から英語の効果的な指導法を間接的に考えることはできるようになっていることが推測できる。英語の教職課程の入り口とも言えるべきこの時点で、1年半の大学での学修を経て、学生たちはどのような能力や知識を備えているかを調査する意義は高いと思われる。この調査により、現段階の学生が修得できる能力が明らかになれば、本共同研究の最終目的である英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーに関する Can-Do リストの作成に資することになる。

〈教職に関する科目〉

教職概論 (2)、教育原理 (2)、学習・発達論 (2)、教育の制度と経営 (2)、教育の方法と技術 (2)、道徳教育の理論と方法 (2)

〈教科に関する科目〉

英語学：English Grammar (2)、Vocabulary Building A (1)

英語コミュニケーション：ELF (12)、English for Academic Purposes A・B (8)

2 調査

上述したように、本研究では、「英語教育学科 英語教員養成コース」の第1期生の留学直前（2016年8月：第3セメスター終了時点）の時点での、能力や意識を明らかにすることを目的としている。その目的を達成する手段として、本調査では当該学生へのアンケート調査によ

る学生の自己評価の方法を採用した。以下、アンケート調査の詳細を述べていく。

本研究では、アンケートを通して、当該学生が、「普段どんな英語学習をしているか」「英語力（英語学習ストラテジーも含む）および英語指導力をどの程度備えていると思っているか」「英語教員になったとき何ができることが大切だと思っているか」を尋ねた。

1つ目の学習の実態については、現職の中高教員への質問紙調査を行ったベネッセ総合教育研究所（2016）の質問項目の「英語力の向上または維持のために、自己研鑽として行っていることがありますか」を参考にし、項目を設定した。現職教員が自身の英語力の向上のために実践していることを、当該学生がどの程度行っているかを明らかにすることで、教員になってからの効果的な自己研鑽に向けて、学生がどのように現時点で学習習慣を形成していけばよいかについて、有益な情報が得られると考えられる。項目例としては「外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる」や「英語の映画を見る」などがある。ベネッセ総合教育研究所（2016）によれば、前者は、中高教員の自己研鑽の手段として、もっともその実践率が高く、中学教員の約76%、高校教員の約69%が実践している。後者は次に高い項目で、同様に中高教員それぞれで約74%、72%となっている。本研究では、これらの各項目について、回答者は「よく行う」「時々行う」「たまに行う」「行わない」の4つの選択肢から1つを選ぶように指示された。質問の全項目は巻末の資料の質問事項1から14で参照されたい。

2つ目の英語力および英語指導力についての項目は、本研究の先行研究である鈴木他（2016）での、教職課程の学生のCan-Do調査の項目、およびその調査の基盤となっている、JACET（大学英語教育学会）教育問題研究会（2014）の『成長のための省察ツール 言語教師のポートフォリオ』に記載されている項目を参考に、作成した。例えば、鈴木他（2016）では「使用頻度の高い語彙・低い語彙、あるいは受容語彙・発信語彙のいずれかであるかを判断し、それらを指導できる」という質問があった。しかし、これは教職課程に属する4年生に向けて尋ねた項目であり、これを教職課程の学生といえども、まだ入門期にいる2年生にとっては、指導技術関連の授業を履修していないことから、質問項目として意義が低い。そこで、本研究では、質問の内容を、指導面から尋ねるのではなく、学習面から問うことを試みた。この項目であれば、「単語を学習するときに、理解できればよい単語と、自分で実際に使える単語とに区別して覚えようとしている」へと学習面からのアプローチへと変更し、該当学生に尋ねた。このように、回答者がまだ大学2年生であることを考慮して、指導面からはまだ自己評価ができない質問の一部は学習面から尋ねるという方法を用いた。また、現時点で、将来、小・中・高の教員になる希望があるかどうかという質問も加えて行った。回答の選択肢は「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4つとした。質問の全項目は巻末の資料の質問事項15から37で参照されたい。

3つ目では、自身が将来英語教員になったときに備えるべきだと思う能力を尋ねる項目を留意した。これらの項目作成のベースになっているものは、鈴木他（2016）で、今回の調査の対象学生が1年次に回答したアンケート調査である。この調査で、学生の意識が高かった項目は

「国際コミュニケーションをとるために英語が必要だ」や「私はネイティブスピーカーのように発音したい」であった。本研究では、こうした意識や態度を、英語を教えるという立場になったことを想定した場合も大切にすべきものかどうかを調査するために、「ネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる」や「ノンネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる」といったように、「育成」という視点から類似する質問をした。回答の選択肢は「とても重要だ」「重要だ」「少し重要だ」「あまり重要ではない」「重要ではない」「まったく重要ではない」の6段階とした。質問の全項目は巻末の資料の質問事項38から51で参照されたい。

このように3つの領域について、合計51個の質問を用意し、「英語教育学科 英語教員養成コース」の第1期生（2015年度入学）の62名に、ウェブ（玉川大学e-Educationシステム「Blackboard@Tamagawa」）上での回答を、留学直前の2016年8月に依頼した。結果、有効回答数は52名であった。

3 調査結果の概要および考察

全51項目のアンケートについての52名の学生による全回答結果の基礎情報については、巻末の資料を参照されたい。ここでは、調査結果の概要および特徴的な回答結果について報告をし、またその考察を行う。

3.1 留学前の学習実態

質問項目1～14は、当該学生の調査時（留学直前）の英語学習の実態に関わるものであった。質問は、「次の事柄を、普段どのくらいの頻度で行っていますか？」に対して、「よく行う」「時々行う」「たまに行う」「行わない」の4つの選択肢から該当するものを1つ選ぶ方法であった。これらの回答を順番に4, 3, 2, 1と数値化し、項目ごとに平均値を算出した結果を順位付けしたものが次の表1である。第1位の「英語教材を使って学習する」は、平均値が2.87ということは、「時々行う」に近い程度で実践されているということである。また、「よく行う」と「時々行う」と回答した学生の合計の割合が表の右のパーセンテージに示されている。表1が示すとおり、「英語教材」と「映画」を使っての学習を半数以上の学生が一定以上の頻度で行っている。第3位以下の項目から実施している学生の数が約3割を切っていることから、学生の学習にはあまり多様性がないことがわかる。前述したベネッセ総合教育研究所（2016）では、中高の教員の多くは、ここで第4位となっている「外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる」ことを実践している。実際に使える英語を教えることが重視されてきていることもあって、中高の教員は積極的に外国人とのコミュニケーションと図ろうとしている一方、留学直前の学生がそのような機会を作ろうとはあまりしていないことは、学習の多様性の少なさを示しており、

今後の教員養成課程での学生指導の課題とも言えるかもしれない。

表1 留学直前の英語学習実態

順位	項目	平均値	「よく行う」 「時々行う」の合計
1	3. 英語教材を使って学習する。	2.87	65.4%
2	2. 英語の映画を見る。	2.61	53.8%
3	8. 英語関連の試験を受ける。	2.33	30.8%
4	1. 外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる。	2.12	28.8%
5	6. 英語のwebサイトを見る。	2.08	28.8%
6	5. 英字新聞や英語の雑誌・本を読む。	2.06	26.9%
	7. 英語でメールのやりとりをする。	2.06	26.9%
8	13. 英語の学習のために、音読をしている。	1.85	23.1%
9	4. テレビで英語のニュースや番組を見る。	1.80	23.1%
10	12. 家族や友人と英語で会話をする。	1.77	17.3%
11	9. webなどから携帯端末にダウンロードした教材や番組を視聴する。	1.75	23.1%
12	14. 英語の学習のために、英文を書き写している。	1.73	23.1%
13	11. 英語で日記をつける。	1.39	13.5%
14	10. 英会話学校を利用する。	1.38	13.5%

3.2 留学前の英語力および英語指導力の自己評価

質問項目15～37では、英語力（英語学習ストラテジーも含む）および英語指導力をどの程度兼ね備えていると学生自身が認識しているかを尋ねた。このうち、質問15～26は主に自身の英語力および英語を学習あるいは使用する際のストラテジーをどの程度持ち合わせているかを調査する項目であった。また、質問27～33は英語教師としての能力や知識がどの程度現段階で備わっているかを問う質問であった。残りの質問34～37は将来、小・中・高の各段階で働きたいか、そして、将来英語を使って仕事をしたいかを尋ねるものであった。ここでは、1つ目の英語力に関わる事項と、2つ目の英語指導力に関わる事項の2つについて全体的な傾向を見ていく。

3.2.1 英語力（英語学習ストラテジーも含む）の自己評価

上述した「3.1 留学前の学習実態」と同じように、ここでも、4つの選択肢の「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」をそれぞれ

順に、4, 3, 2, 1と数値化し、項目ごとに平均値を算出した結果を順位付けした。そして、「かなり当てはまる」と「やや当てはまる」と回答した学生の数を合計した割合を算出した。これらの結果が次の表2である。

第1位は「話したり書いたりする際に、なるべく基本的な分かりやすい単語や表現を使うように意識している」であり、平均値が3を超えていることから、英語で発信をする際には、分かりやすい表現を強く意識して使っていることがわかる。これは、おそらくは、英語の授業の内外にかかわらず、英語で何かを発信する際は、聞き手や読み手を意識して、内容を伝えようという気持ちが強く出ているためだと考えられる。学生たちが履修している英語の授業においては、相手を意識しながら、意味のあるやり取りが行われていることが推測される。コミュニケーション重視の授業展開がなされていることは肯定的な結果と捉えてよいのではないだろうか。一方で、自己評価が低い項目として、プレゼンテーション（第9位）やディベート・ディスカッション（第12位）など、今後中高の英語教育で生徒に実践させるべきとされている「高

表2 留学直前の英語力の自己評価

順位	項目	平均値	「かなり当てはまる」 「やや当てはまる」 の合計
1	16. 話したり書いたりする際に、なるべく基本的な分かりやすい単語や表現を使うように意識している。	3.23	86.5%
2	19. 英語で話す際に、頭の中で日本語を英語に変換している。	2.87	71.2%
3	25. 自分の英語力を向上させるために、何をすべきかを分かっている。	2.83	65.4%
4	17. 話したり書いたりする際に、自分が使っている英語の単語・表現や文法の間違いに気がついている。	2.75	63.5%
5	26. どんな辞書や参考書が自分の英語学習に役立つかを把握している。	2.62	53.8%
6	20. 英語で書く際に、一度日本語で文を作ってから、それを英語の文に変換している。	2.56	50.0%
7	22. 身近な内容であれば、即興で英語で話をするができる。	2.52	55.8%
8	24. 英語でパラグラフを書く際に、アウトラインを適切に作ってから、英文を書くことができる。	2.45	36.5%
9	18. 話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自らで修正できる。	2.42	44.2%
	21. 英語でプレゼンテーションをすることができる。	2.42	40.4%
11	15. 単語を学習するときに、理解できればよい単語と、自分で実際に使える単語とに区別して覚えようとしている。	2.40	44.2%
12	23. 英語でディベートやディスカッションをすることができる。	2.04	25.0%

度な言語活動」については、学生自身が学習者として実践することがあまりできていないという結果になっている。したがって、まずは学生（あるいは教員）自身が、英語の使用者としてこのような高度な活動をできる能力を養成していかななくてはならない。留学を通して、このような能力が伸長していくことを期待しながらも、本学科が提供する授業科目においても、プレゼンテーションやディスカッションの基礎になる能力を留学前に育成する必要があるだろう。

3.2.2 英語指導力の自己評価

ここでは、大学2年生の中間地点（8月）で、英語教員に必要な力をどれくらい兼ね備えているかを調査した項目の回答結果を見ていく。当然のことながら、前述したとおり、英語の指導技術を修得するための授業はまだ履修していないため、学生の自己評価は非常に低いものになっている。もともと、ここで問うている各能力がどの程度の能力であるかをどのように判断しているかという点も学生によって異なることが推測され、非常に高い能力を想定した学生もいれば、逆に、低い能力を想定した学生もいるだろう。いずれにせよ、自分が仮定した能力には現段階で及んでいないと考える学生が多いという結果になっている。特に、高校教員として必要な力を持っていると考えている学生は10%未満であり、中学校教員に必要な力を持っていると回答した割合とは差が出ている。中・高の英語教員に求められる英語力がそもそも異なるものなのかという議論は非常に複雑であると思われる、結論は一朝一夕には出すことはできないが、学生自身は高校で英語の授業を行うための英語力の方が高いと判断していることが分かる。

表3 留学直前の英語指導力の自己評価

順位	項目	平均値	「かなり当てはまる」 「やや当てはまる」 の合計
1	31. 現在、中高の英語の教員として必要な英単語を知っていると思う。	2.12	23.1%
2	27. 現在、中学校の英語の授業を行うための全体的な英語力が備わっていると思う。	2.08	25.0%
3	33. 現在、中高の英語の教員として、生徒に英語学習についての適切な助言をすることができると思う。	2.04	23.1%
4	30. 現在、中高の英語の教員として必要な英語の発音のスキルが備わっていると思う。	1.88	17.3%
5	29. 現在、中高の英語の教員として必要な英語の文法の知識が備わっていると思う。	1.83	9.6%
6	32. 現在、中高の英語の教員として授業を行うための、全体的な指導力が身についていると思う。	1.79	7.7%
7	28. 現在、高校の英語の授業を行うための全体的な英語力が備わっていると思う。	1.75	9.6%

平均値は2.5以下である（つまり、自己評価としては否定的な方が多い）が、第1位の項目は「英単語を知っている」というものであった。ここから、英語力の基礎となるものが語彙の力であると学生自身が意識していることが分かる。一定の語彙数を身につけた上で、次の段階に進むことは英語学習の一つの典型的な過程なのかもしれない。本学科では入学直後の学期に Vocabulary Building A という科目を必修にしているが、妥当なことだと言えるだろう。

3.3 英語教員に必要な力を留学前にどうイメージしているか

質問項目 38～51では、「英語教員になったとき何ができることが大切だと思っているか」を項目ごとに尋ねた。これら14項目の分析および考察は後述の「4.3 留学前の英語観」で提示するため、ここでは、これらの項目のうち、すでに見た質問項目1～37までと関連性があるものを抽出して考察する。ここでも同じように、質問項目38～51は回答結果を数値化した。回答選択肢は「とても重要だ」「重要だ」「少し重要だ」「あまり重要ではない」「重要ではない」「まったく重要ではない」の6つであったが、どの項目でも「あまり重要ではない」と「まったく重要ではない」はどの回答者も選択しなかったため、実質は4つの選択肢による回答であった。この4つの回答を順に4, 3, 2, 1と数値化し、1～37の同様に数値化された結果と相関係数を算出した。「37項目(1～37)×14項目(38～51)」のすべての相関係数を見たところ、0.5以上の数値は皆無であった。若干の関連性があると言える0.4以上は以下の5つの項目間で見られた。

この5つの関係性を見ると、いくつか興味深いことが分かる。2つ目の両項目(17と40)は「正確性」という点で共通している。17の「自分の英語の間違いに気がつく」ことができること

表4 項目間の関係性

相関係数	英語力・英語学習実態など	英語指導観
0.45	12. 家族や友人と英語で会話をする。	43. ネイティブスピーカーが用いる語彙や表現を教えることができる。
0.41	17. 話したり書いたりする際に、自分が使っている英語の単語・表現や文法の違いに気がついている。	40. 自分の考えや感情を正確な英語で表現する力を育成することができる。
0.41	24. 英語でパラグラフを書く際に、アウトラインを適切に作ってから、英文を書くことができる。	47. ライティング力を育成することができる。
0.41	26. どんな辞書や参考書が自分の英語学習に役立つかを把握している。	47. ライティング力を育成することができる。
0.43	30. 現在、中高の英語の教員として必要な英語の発音のスキルが備わっていると思う。	38. ネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる。

と「正確な英語で表現をする力を育成する」ことができることは何らかの関連性があると言える。自分の話すあるいは書く英語をモニターできる力を育成することで、正確な表現を教えることができる力も育成することに繋がるかもしれない。

3つ目（24と47）と4つ目（26と47）は、辞書や参考書がライティングに関わるものと推測すれば、これらはすべて「書くこと」に関わることであると言える。2つ目と同様に、学習において「自分ができること」と、教員として「育成できること」に関連性が見出せる。5つ目（30と38）では「母語話者との意思疎通能力の育成」と「自身の発音スキル」の関連性が見えた。ネイティブスピーカーとの意思疎通には発音の能力が一定の条件を果たすということが、学生たちの意識から垣間見える。

3.4 詳細な分析および考察に向けて

このように、留学直前の学生の自己評価をとおして、教員養成課程で育成すべき能力や知識の優先順位が見えてきた。また、どのような能力を育てれば、将来の教職へ向けての意識が高まるかの示唆も得られた。そこで、次章では、これらの結果をさらに詳細に検証するために、「語彙」「文法」「英語観」の3つの視点から分析を行った結果を報告していく。「語彙」については、アンケートに回答した学生が、語彙サイズテストの受験も行っており、アンケートの回答傾向と語彙サイズの関連を見るのが可能となる。また、「文法」についても、対象学生が2年次の春semesterにおいて、必修科目であるEnglish Grammarを履修しており、その定期試験の結果と本調査のアンケートの回答傾向を比較し、その関連性を検証できる。3つ目の「英語観」については、上述した通り、鈴木他（2016）において、同じ学生が調査対象となっていることから、その関連性が見出せる。また、本大学では全学部をとおしてELF（English as a Lingua Franca）のコンセプトを活かした英語の授業（ELFという名の英語の授業）を実践しており、対象学生は2年次春semesterまでの3学期間、各4単位（100分授業を週2回）分の履修をしている。ELFの授業を履修していれば、何らかの「英語観」が構築されていると推測でき、それを検証することは意義深いと思われる。これら「語彙」「文法」「英語観」の各観点からの詳細な分析結果を次に見ていく。

（工藤）

4 「語彙」「文法」「英語観」の観点からの分析および考察

4.1 推定語彙サイズと語彙に関するアンケート項目との関係

本節の目的の一つは、留学前の推定語彙サイズを知り今後の指導に役立てることにある。将来的には留学前と留学後の語彙サイズを測定することによりカリキュラムの効果について検証

することを考えている。目的の二つ目は、語彙サイズが増えることによって学生の意識がどのように変化していくのか把握することにある。長期的には、留学前と留学後で学習者の意識がどのように変化していくのかを把握することを考えている。

4.1.1 留学前1年次の推定語彙サイズ

(1) 語彙を測定するという事について

語彙力を測定するとき、語彙をどれだけたくさん知っているかという語彙サイズを図る側面と、語彙をどれだけ深く知っているかという語彙についての知識の深さを測る側面の両方から調査する必要がある。さらに、語彙といっても発表語彙と受容語彙といった側面もあり、学習者の語彙サイズを測定することは容易なことではない。語彙サイズを測るテストとしては、Nation (1990, 2001, 2008) の Vocabulary Levels Test (以下、VLT) や、語彙についての知識の深さを測るテストとして Wesche and Paribakht (1996) が広く知られている。

語彙サイズを測るテスト VLT は、選択肢が目標言語である英語で記述されているために、日本の中学、高校の初級レベルの学習者を対象とする英語教育現場では活用しにくい。望月テスト (1998) は、設問形式が日本語であることもあり、中学生、高校生の受容語彙サイズを測るテストとして広く用いられている (金谷他, 2003, 2004, 望月他, 2003)。本稿では、学習者の受容語彙のサイズを測定するために、望月テスト (1998) を活用した。

(2) 望月テストの主な形式について

- ・ 1000 語 (vst11) から 7000 語 (vst71) までの 7 段階で構成されており、1000 語レベルから 2000 語レベル、3000 語レベル、4000 語レベル、5000 語レベル、6000 語レベル、7000 語レベルまでである。なお、vst は vocabulary size test を指す。
- ・ 1000 語ごとに B4 版 1 枚のテスト用紙となっているので、7000 語レベルまで実施すると 7 枚となる。
- ・ いずれのレベルでも問題形式は同じである。各レベルは 30 問からなり、各問は、2 つの日本語の訳語が示され、それぞれに該当する英単語を 6 つの選択肢の英単語から選ぶ形式となっている。
- ・ 7000 語レベルまで実施した場合の語彙サイズの推定は以下の計算式で表される。
(各レベルの正答数の合計) ÷ (30 × 7) × 7000

(3) 望月テストの実施方法

- ・ 被験者は、2015 年度の英語教育学科の大学 1 年生である。本研究のアンケート調査で対象とした同学科英語教員養成コースの学生に加えて、同学科のもう 1 つのコースである ELF コミュニケーションコース所属の学生も受験した。受験者の合計は 84 名であった。
- ・ 実施時期は、2016 年 1 月 21 日である。テスト監督はクラス担任で、各教室において以下の

ように実施した。

- ・ vst1とvst2の問題用紙（両面印刷）を配布。回答は回答欄に数字で記入。回答時間は10分。続いて、vst3とvst4の問題用紙（両面印刷）を配布。回答時間は10分。次に、vst5の問題用紙（片面印刷）を配布。回答時間は10分。次に、vst6の問題用紙（片面印刷）を配布。回答時間は10分。最後に、vst7の問題用紙（片面印刷）を配布。回答時間は10分。

(4) 望月テストの結果

テスト答案を回収後、採点しその結果を記述統計とヒストグラムで表すと以下のようになった。

表5 推定語彙サイズの記述統計の結果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
	統計量	統計量	統計量	統計量	統計量
推定語彙サイズ	84	2633.00	5867.00	4686.48	621.223

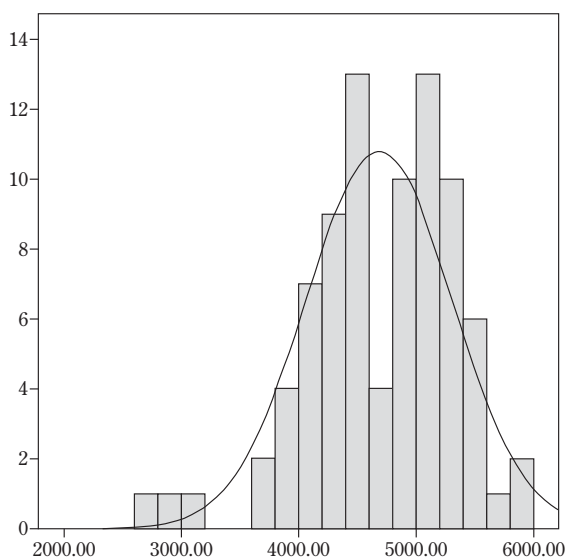


図1 推定語彙サイズのヒストグラム

本調査の目的として、推定語彙サイズテストを行うことによって、まず学習者の現状を知り、指導に活かすことが目的である。例えば、現行の学習指導要領では、語彙数について、中学校で1200語、高校で1800語、中学高校で合わせて3000語扱うことが定められているが、表5の最小値、図1の分布から3000語に届いていない学生がいることがわかる。実際のデータにあたってみると、3000語に届いていない学生が2名（2633語、2967語）いることがわかり、今後の語彙指導が必要であると言える。

本調査は受容語彙についてどれだけ知っているかの調査であるから、語彙サイズが大きいからといって、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの技能を保障するものではない。そのため、今後、語彙と他の技能との関連については更なる調査が必要である。具体的には、語彙サイズとTOEICスコアやIELTSスコアとの比較が考えられる。

さらに、今後の課題として、留学から戻ってきてから再度、語彙サイズテストを実施することで留学前と留学後の語彙サイズの伸びを知ることができるので、今後の追跡調査を実施したいと考えている。

4.1.2 英語教職課程1年生の推定語彙サイズと語彙に関するアンケート項目との関係

推定語彙サイズの結果から、語彙サイズの大きい学生ほど、語彙に関するアンケート項目でも意識の高い傾向が見られるのかという疑問が湧く。語彙サイズの大きい学生ほど、語彙に関する意識の高い傾向が見られるとすれば、それはどのようなアンケート項目に見られるのかについて調査したい。

(1) 推定語彙サイズの得点をもとに3段階に分ける

推定語彙サイズの結果をもとに、上位群、中位群、下位群の3段階に分けたい。3段階の分け方として、平均値から上下に標準偏差（以下、 SD ）の半分のところ（平均値 $\pm 0.5SD$ ）で区分する。表5より、推定語彙サイズの平均値は4686.48語、 SD は621.223なので、平均値 $\pm 0.5SD$ にもとづいて上位・中位・下位群に分けるとすると、 4686.48 ± 310.6115 で、4997.0915語以上が上位群、4375.8685語以下が下位群で、残りを中位群とする。

(2) 語彙に関するアンケート項目の抽出

英語教員養成コースの学生を対象にしたアンケート項目の総数51項目から、語彙に関するアンケート項目を抽出したところ以下の7項目となった。

- 15 単語を学習するときに、理解できればよい単語と、自分で実際に使える単語とに区別して覚えようとしている。
- 16 話したり書いたりする際に、なるべく基本的な分かりやすい単語や表現を使うように意識している。
- 17 話したり書いたりする際に、自分が使っている英語の単語・表現や文法の間違いに気がついている。
- 18 話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自らで修正できる。
- 31 現在、中高の英語の教員として必要な英単語を知っていると思う。
- 43 ネイティブスピーカーが用いる語彙や表現を教えることができる。

50 正確な発音を教えることができる。

(3) 一元配置の分散分析の結果

語彙テストとアンケートの両方を受験した51名について、推定語彙サイズの上位群(23名)、中位群(17名)、下位群(11名)の違いにより、語彙に関するアンケート項目の得点に差があるかを比較した。

語彙に関する7項目について分散分析を行った結果、「No. 18 話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自らで修正できる」の項目について上位群、中位群、下位群に有意な差があった ($F(2,48) = 9.371, p < .05$)。

Tukey HSD法を用いた多重比較によると、上位群の平均と中位群の平均が下位群の平均よりも有意に大きかった ($MSe = .337, p < .05$)。しかし、上位群と中位群の間の平均の差は有意ではなかった。

本調査からわかったこととして、アンケート項目の「18 話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自らで修正できる」という項目について、上位群、中位群の学生は「当てはまる」と考えているが、下位群の学生は、自分の語彙力に対する不安からと思われるが、「当てはまらない」と感じている傾向が把握できる。

本調査は留学前の学生の語彙に関するアンケート項目についての意識調査の結果であるが、9か月の留学後に、再度調査を行い学生の意識にどのような変化が見られるか継続調査したいと考えている。

(日臺)

4.2 留学前の英文法に関する認識

英語教育において語彙と並んで重要視される要素の一つに文法を挙げることができる。語と語を繋げて文を作る上で、好むと好まざるにかかわらず文法を避けて通ることはできない(JACET(大学英語教育学会)SLA研究会(2013)などを参照)。それだけに英語教員養成を行う上で、英語教職課程受講生が英文法についてどのような認識を持ち、また実際にどの程度の運用能力および明示的知識、さらには指導力を身に付けることができるのかというのは、非常に重要な問題である。以下では、英文法に対する学生の認識・態度に関する先行研究を概観した後、本研究で留学前に行ったアンケートの中で英文法に関連する項目に焦点をあてて分析し、英語教職課程受講生が留学前の時点で英文法についてどのような認識・態度を持っているのかを明らかにするとともに、そこから見えてくる課題について論じる。

4.2.1 英文法に対する学生の意識・態度に関する先行研究

英文法に関する学生の認識・態度を扱った先行研究に日臺・松本・高橋・鈴木・小田・榎本・

丹治 (2013) がある。日墓他 (2013) は、「中学校学習指導要領」(文部科学省, 2008) にある文法事項から 52 項目、「高等学校学習指導要領」(文部科学省, 2010) にある文法項目から 12 項目を抽出し、その計 64 項目について 4 段階のリッカート形式を用いて学生の理解度に関する認識についてアンケート調査を行った。また同時に、英語の読解・産出における文法の活用力に関する 2 項目、英語・文法に対する態度(「好き・嫌い」「得意・不得意」)に関する 3 項目についても同様に調査を行った。そうしたところ、本研究との直接的な関連性に焦点をあてると、以下のような結果が得られた(文法関連事項を一部抜粋)。

- a. 中学校・高等学校の学習指導要領にある文法項目の全て(1～64)について、学生は「理解している」としており、そのうち半数以上となる 36 項目(56.3%)では最高 4 ポイント中平均 3.5 以上と高いレベルで「理解している」と認識している。
- b. 文法の活用力に関する 2 項目についても「活用できる」としており、読解においても産出(スピーキングおよびライティング)においても文法を活用することができると認識している。
- c. 英語・文法に対する態度に関する 3 項目では、英語は「好き」であるものの、文法は「好きでも嫌いでもない」「不得意だ」と認識している。

ここで重要なのは、学生が全体的に英文法を「理解している」「活用できる」と、英文法の知識と運用能力については肯定的な(高い)認識を示している一方で、英文法は「不得意だ」と、英文法の得手不得手については否定的な(低い)認識・態度を示している点である。日墓他 (2013) は学生の認識に焦点をあてたため、実際に英文法の知識と運用能力がどの程度あるのかについては扱っていない。しかしながら、それでも英文法を「理解している」「活用できる」という認識と、英文法が「不得意だ」という認識の間には矛盾が見られる。この矛盾について、日墓他 (2013) では、学生の「理解している」という認識が、本当に「理解している」ことを示しているのではなく、実際には「(言われれば)知っている」といったような意味で解釈されているか、あるいは理解していないのに「理解している」と思い込んでいる可能性があるのではないかと指摘している。そして、取り沙汰される文法力低下の要因を探る上での一つの鍵が、この矛盾の中にあるのではないかと論じている。

4.2.2 文法関連項目の分析 (1)

本研究では、文法に限らずより広範囲に渡る項目に関する学生の認識・態度を、特に英語教員養成の観点から見するために、日墓他 (2013) にあるような文法事象に関する具体的な項目は省く一方で、文法の使用と指導に関する項目を設けた。全 51 項目中、英文法に関連するのは、表 6 にある英文法の知識・使用に関する 3 項目と、表 7 にある英文法の指導に関する 2 項目の計 5 項目である。

英文法の知識・使用に関する3項目（17, 18, 29）では、英文法についてどの程度の知識があり、どの程度活用できると認識しているかを調査している。「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4段階のリッカート形式を用い、それぞれポイントを4, 3, 2, 1として平均値、標準偏差、最頻値を求めた。結果は表6のとおりである。

表6 英文法の知識・使用に関する3項目

次の事柄はどのくらい当てはまりますか？		平均値 (最高4)	標準偏差	最頻値 (%)
17	話したり書いたりする際に、自分が使っている英語の単語・表現や文法の間違いに気がついている。	2.75	0.74	3 (50.0)
18	話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自ら修正できる。	2.42	0.66	2 (50.0)
29	現在、中高の英語の教員として必要な英語の文法の知識が備わっていると思う。	1.83	0.58	2 (63.5)

平均値の2.5を「当てはまる」と「当てはまらない」の境界とすると（実際の回答時の選択肢としては与えられていない数字：日基他（2013）参照），項目17ではそれを上回り「当てはまる」とする一方で，項目18ではやや下回り「当てはまらない」としている。つまり，自分が話したり書いたりする際の単語・表現・文法の間違いに気付くことはできるが，自ら修正するのは難しいと認識している。これは，実際の言語使用において文法の知識を十分に活用できていないとの認識であると解釈することができ，その点では日基他（2013）の調査結果（b）と対照的であると言える。また，項目29では2.0（「あまり当てはまらない」）を下回り，中学校・高等学校の英語教員に必要な英文法の知識レベルと現在（調査当時）の知識レベルとの間には大きな開きがあると考えていることが分かる。項目17・18と比べて大きく平均値が低いのは，「中高の英語の教員として」という部分に対する反応であると考えられ（項目17では一定以上の知識があるとの認識が見られる），それだけ中学校・高等学校の英語教員には高いレベルでの英文法の知識が必要であると認識されていることが分かる。

次に，英文法の指導に関する2項目（40, 49）では，将来英語教員になった時に何が重要であると認識しているかを調査している。「とても重要だ」「重要だ」「少し重要だ」「あまり重要ではない」「重要ではない」「まったく重要ではない」の6段階のリッカート形式を用い，それぞれポイントを6, 5, 4, 3, 2, 1として平均値，標準偏差，最頻値を求めた。結果は表7のとおりである。

平均値の3.5を「重要だ」「重要ではない」の境界とすると（実際の回答時の選択肢としては与えられていない数字：日基他（2013）参照），いずれも5.0（「重要だ」）を上回り，正確な英語での表現力を育成する力および正確な文法を教える力が英語教員には重要であるとの認識をかなり明確に持っていることが分かる。これは，上の項目29で見られた現在（調査当時）の

表7 英文法の指導に関する2項目

あなたが、将来、英語教員になったとき、次の事柄ができることは、どのくらい重要だと思いますか？		平均値 (最高6)	標準偏差	最頻値 (%)
40	自分の考えや感情を正確な英語で表現する力を育成することができる。	5.45	0.78	6 (55.8)
49	正確な文法を教えることができる。	5.17	0.78	6 (40.4)

英文法の知識に関する認識と強く関連するもので、英語教員に必要とされる英文法の知識に関する認識について同じ方向性を示していると言える。

4.2.3 文法関連項目の分析 (2)

ここまでは、調査対象の学生を全体的に分析してきたが、上で見られた英文法に関する認識は、英文法の理解度・習熟度によって傾向が異なる可能性が考えられる。例えば、項目17で「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と回答した学生と、「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」と回答した学生では、英文法の理解度・習熟度に違いが見られる可能性がある。そこで、本調査の調査対象となった学生が2クラスに分かれて全員受講した授業「English Grammar」における共通中間試験・期末試験の結果と本調査における文法関連項目の結果との間の関連についてt検定を用いて検証した。

English Grammarの共通中間試験・期末試験は、各100点の計200点満点で、英文法の運用能力だけでなく英文法のメタ言語的知識についても問う問題となっている。配点の比率としては、両試験中、英文法の運用能力を問う問題が31%、英文法のメタ言語的知識を問う問題が26%、英文法の運用能力とメタ言語的知識の両方を問う問題が43%となっており、運用能力とメタ言語的知識の両方の点からバランスを取りながら総合的に英文法の理解度・習熟度を見る内容となっている¹⁾。

ここでは、英文法の知識・使用に関する3項目（17, 18, 29）について「かなり当てはまる」「やや当てはまる」と回答した学生と「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」と回答した学生の2グループに分けて、English Grammarの共通中間試験・期末試験の総合得点の平均点を比較した。結果は以下のとおりである。

表8 英文法の知識・使用に関する3項目と英文法試験結果の関係

項目	当てはまる			当てはまらない			有意確率
	N	平均点	標準偏差	N	平均点	標準偏差	
17	33	126.12	24.20	18	97.28	24.42	0.0002
18	23	127.48	24.35	29	106.28	26.63	0.0055
29	5	146.80	11.30	47	112.34	26.88	0.0075

いずれの項目についても、「当てはまる」とした学生グループと「当てはまらない」とした学生グループとの間には、平均点に有意差 ($p < .05$) が認められた。このことから、自分が話したり書いたりする際の単語・表現・文法の違いに気付くことができると認識している学生、またそうした間違いを修正することができるかと認識している学生は、それができないと認識している学生よりも、英文法の理解度・習熟度が高いと言える。また、中高の英語の教員として必要な英文法の知識が備わっていると認識している学生は、備わっていないと認識している学生よりも、英文法の理解度・習熟度が高いと言える。

これに対して、英文法の指導に関する2項目 (40, 49) については、項目40における未回答を含む2名を除いては、全員が「重要だ」「とても重要だ」「重要だ」「少し重要だ」とする認識を示したため、項目17・18・29のような形で学生を回答により2分しての比較は行えなかった。そこで、同じ「重要だ」とする中でも、認識の程度により英文法の理解度・習熟度に違いがあるかを検証するために、各回答間で同様に平均点の比較を行った。結果は以下のとおりである。

表9 英文法の指導に関する2項目と英文法試験結果の関係

項目	比較された回答 (A - B)	左側の回答 (A)			右側の回答 (B)			有意確率
		N	平均点	標準偏差	N	平均点	標準偏差	
40	とても重要だ—重要だ	29	115.79	24.84	18	113.28	31.98	0.77
	とても重要だ—少し重要だ	29	115.79	24.84	3	134.00	26.73	0.25
	重要だ—少し重要だ	18	113.28	31.98	3	134.00	26.73	0.33
49	とても重要だ—重要だ	21	117.62	26.04	19	113.47	28.37	0.64
	とても重要だ—少し重要だ	21	117.62	26.04	12	115.67	29.24	0.85
	重要だ—少し重要だ	19	113.47	28.37	12	115.67	29.24	0.84

いずれの項目も、どの回答間においても有意差 ($p < .05$) は見られなかった。このことから、将来英語教員になった時に正確な英語での表現力を育成する力および正確な文法を教える力がどの程度重要かについては、ほぼ全員が「重要だ」と認識している一方、その中でどの程度重要だと認識しているかという重要度の認識の違いは、英文法の理解度・習熟度に関連性がないことが分かった。

4.2.4 考察

上の結果を踏まえ、以下では考察を加える。まず、一つ目の分析を行った4.2.2について、表6の結果を見ると、留学前、学生は自分の英文法の知識および運用能力について、不十分であると認識していることが分かる。上でも指摘しているが、これは日墓他 (2013) での結果 (b) と異なる傾向を示している。問題は、なぜ異なるかである。一つの可能性としては、調査対象である学生の違いが考えられる。日墓他 (2013) では文学部比較文化学科の学生が対象となっていたが、本調査では学科としてより英語および英語教育に焦点のある文学部英語教育学科、

しかも英語教員養成コース所属の学生である。そのため、本調査の対象となった学生は、総じて英語に対する関心がより高いと言える。そうなると、自分の英語力をより客観的に把握しようとするとともに、目標としてより高いレベルを設定することが考えられる。その結果として、自分の英文法の知識・運用能力が不十分であるとの認識に至ることは十分にあり得る。

一方、表7の結果を見ると、英語教員になる上で、正確な英語での表現力を育成する力および正確な文法を教える力が重要だとの認識がかなり明確に見られる。これは、コミュニケーション重視という近年の英語教育の文脈の中で改めて考えてみる必要がある。文法指導は、文法訳読教授法が一般的だった時代に比べ、コミュニケーション型言語教授法が重視されるようになってから軽視される傾向にあった（JACET（大学英語教育学会）SLA研究会（2013）などを参照）。これは、学生から今もしばしば聞かれる「話すのに文法は要らないと思う」といった趣旨の発言にも見て取ることができる。その一方で、最近では第二言語習得論・教育論でフォーカス・オン・フォームが脚光を浴び、文法指導の役割が異なる形で再評価されている。ここで重要なのは、こうしたパラダイム・シフトは大きな流れとして捉えるべきものであり、実際には文法重視の立場もコミュニケーション重視の立場も混在している点である。特に中高の教育現場では英語教員の教え方に加えて生徒や学校の特性などもあり、事実上どちらか一方が中心となっている所もあれば、両方のバランスが比較的とれている所もある。学生は、そうした幅広い環境の中で英語を学習してきているのである。それにもかかわらず、ほぼ全員が英語教員になる上で文法の指導力の重要性が非常に高いと認識しているのは注目に値する。文法そのものが持つ重要性が認識されているという側面も否めないが、上のような状況を考えると、「将来、英語教員なったとき」という問いかけが、より文法に対する意識を高めていると考えることができる。この結果は、学生の持つ英語教師像とも密接に関係しているものと思われる。

次に、二つ目の分析を行った4.2.3について、表8の結果を見ると、自分が使用する単語・表現・文法の違いに気付くことができると認識する学生、またそうした違いを修正できると認識する学生は、それができないと認識する学生よりも、英文法の理解度・習熟度が高いことが分かる。また、中高の英語の教員として必要な英文法の知識が備わっていると認識する学生は、備わっていないと認識する学生よりも、英文法の理解度・習熟度が高い。ここから見えてくるのは、当該学生が比較的正確に自らの英文法の理解度・習熟度を把握しているようであるということである。上でも述べたが、本調査の対象となった学生は文学部英語教育学科英語教員養成コースの所属であり、英語および英語教育に対する意識・関心は高い。そのため、自らの英文法の理解度・習熟度を比較的正確に踏まえた上でアンケート調査の項目に答えているものと考えられる。

これに対して、表9の結果を見ると、将来英語教員になった時の英文法の指導力は、ほぼ全ての学生が高いレベルで「重要だ」と認識しており、その認識の程度の差異は、英文法の理解度・習熟度と関連性がないことが分かった。興味深いのは、「将来、英語教員になったとき」と問いかけている項目38から項目51について、ほぼ全ての回答が「重要だ」（「とても重要だ」

「重要だ」「少し重要だ」とされている点である（添付資料「アンケート集計結果：質問38から51」参照）。「将来、英語教員になったとき」という文脈で考えると、「重要ではない」項目はないと認識されるのかもしれない。

本節では、アンケート調査の中でも、特に文法に関する項目に絞り、留学前の英文法に関する学生の認識を調査した。留学中は、当然のことながら英語を使用する機会が圧倒的に増えるだけでなく、文化的にも様々な刺激を受け、また英語研修を通して異なったスタイル・文脈での英語教育・指導にも接することとなる。それだけに、上で見たような英文法に関する認識も、留学中、そして留学後と変化していくことが予想される。どのような点に変化し、どのような点に変化しないのかは、今後の追跡調査での重要な課題である。

(松本)

4.3 留学前の英語観

本節では学生たちの留学前の英語観について概観していく。その前に、昨年の紀要（鈴木、工藤、日臺、松本、2016）で議論した彼らの大学入学直後（2015年4月）の英語観を振り返っておこう。鈴木他（2016）では、英語が外国語という位置付けから国際語へと変化したことに伴い、英語教員が担う役割も単なる語学教員から他国・他者・他文化に対する理解と共感を育成するグローバル・エデュケーターへと変化していることを述べた。それを踏まえた上で、「日本人大学生の英語観について」という18のリッカート形式の質問からなるアンケートの結果を提示している。そこでは、英語は国際語であることは学生たちにとっては疑いようもないことである一方、その「国際」という点、つまり、いわゆるネイティブスピーカー（NS）の英語以外の英語変種・それらの話者の存在に関しては知識が欠如していることが分かった。そのため、学生たちにとって国際語としての英語の学習とは、NSの英語を身に着け、彼らの文化を理解し、彼らとの対話（学生の視点では、スピーキングとリスニング）を通じてコミュニケーションできるようになることと同等であるようだ、と論じた。その一方で、英語の正確性については、NSのような発音の習得に対しての欲求は非常に高い一方、「正しい」とされる文法の習得にはやや懐疑的であり、文法はコミュニケーションの重要な要素であるとは認識されていないようだ、とも考察した。

この議論を前提としつつ、今回のアンケートでの英語観に関する質問項目の結果を見わたしていく。しかし、ここで注意しておかなくてはならないことは、今回見ていく質問項目は前回のものと同じものではない、ということである。昨年度実施したアンケートは学生自身のその時の英語観を問うたものであるが、今回議論するアンケートは「自分が、将来、英語教員になった時」に「どのような能力が重要となると思うか」を問うたものである。つまり、質問項目が異なるだけでなく、それに答える立場も視点も異なったアンケートの結果を見ていくことになる。そのため、昨年度のものとは簡単に比べることが出来ないことを心に留めておきたい。それ

でもなお、昨年度と共通した特性や、多少の変化を見いだせる点には、積極的に言及していく。

4.3.1 結果と考察

前述したように、今回の英語観に関する質問は、「あなたが、将来、英語教員になったとき、次の事柄ができることは、どのくらい重要だと思いますか」という設問で14項目について尋ねたものである。回答を「とても重要だ」「重要だ」「少し重要だ」「あまり重要ではない」「重要ではない」「全く重要ではない」の6段階で尋ね、順に6から1とし統計処理を行った。表10は質問項目を平均値の高い順に並べたものである。併せて、標準偏差と最頻値（とその占める割合）も提示した。

表10 英語観に関する質問14項目

順位	あなたが、将来、英語教員になったとき、次の事柄ができることは、どのくらい重要だと思いますか？	平均値	標準偏差	最頻値 (%)
1	46. スピーキング力を育成することができる。	5.75	0.51	6 (78.8)
2	48. コミュニケーション能力を育成することができる。	5.65	0.52	6 (67.3)
3	51. 英語に多少の間違いはあっても、自分の考えや感情を効果的に表現する力を育成することができる。	5.64	0.59	6 (69.2)
4	45. リスニング力を育成することができる。	5.63	0.48	6 (61.5)
5	40. 自分の考えや感情を正確な英語で表現する力を育成することができる。	5.45	0.78	6 (55.8)
6	39. ノンネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる。	5.44	0.66	6 (53.8)
7	38. ネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる。	5.39	0.69	6 (50.0)
8	47. ライティング力を育成することができる。	5.37	0.76	6 (48.1)
9	50. 正確な発音を教えることができる。	5.19	0.92	5/6 (42.3)
10	49. 正確な文法を教えることができる。	5.17	0.78	6 (40.4)
11	44. リーディング力を育成することができる。	5.15	0.66	5 (53.8)
12	41. 英語圏の国々の文化に興味を持たせることができる。	5.14	0.96	6 (42.3)
13	42. 世界の様々な国の文化に興味を持たせることができる。	5.10	1.11	6 (44.2)
14	43. ネイティブスピーカーが用いる語彙や表現を教えることができる。	4.85	0.82	5 (46.2)

まずは、平均値上位4項目を見ていこう。これらの平均値は5.60以上であり、6「とても重要だ」を選んだ学生も60%を超えていることが分かる。平均値の1位(5.76)と4位(5.63)は、四技能のうちのスピーキング・リスニングを育成する能力の重要性である。他の二技能、ライティング(平均値5.37, 8位)・リーディング(5.15, 11位)と比べると0.4ポイント以上高く

なり、学生たちは口頭的・聴覚的能力の育成をより重視していることが分かる。

この考えは「コミュニケーション能力の育成」の平均値の高さ(5.65, 2位)に反映しているかもしれない。実際に、コミュニケーション能力の育成に対し6「とても重要だ」を選んだ35名のうちスピーキングも6を選んだのは33名でほぼ全員である。それに加えて、リスニングも6を選んだ学生は24名に上り、コミュニケーション能力の育成が重要だと答えた学生のうち69%がスピーキングとリスニングを重視していることが分かる。その一方で、その35名のうちライティングもリーディングも6「とても重要だ」と答えた学生は11名(31%)のみであり、その数は半減する。また、この11名はスピーキング・リスニングにも6を付けており、それらをスピーキング・リスニングよりも重視しているわけではないことにも言及しておきたい。これらのことから口頭的・聴覚的能力、とりわけ前者、がコミュニケーション能力の中核を担うものと、多くの学生が考えていることが分かる。

次に平均値第3位(5.64)である「英語に多少の間違ひはあっても、自分の考えや感情を効果的に表現する力を育成することができる」について考えていこう。この項目と対となるのは「自分の考えや感情を正確な英語で表現する力を育成することができる」である。これの平均値は5.45(5位)となり、値は約0.2ポイント下がる。これにより、英語の正確性よりもコミュニケーションの効率性に多少の重きが置かれていることが分かる。しかし、効率性に対し6「とても重要だ」を選んだ学生36名のうち、正確性に対しても6を選んだ学生は21名(58%)に上る。残りの15名のうち14名は、正確性に対し5「重要だ」を選んでおり(残りの1名は2「重要でない」を選択している)、正確性と効率性はある意味で同等に扱われているようにも見える。そこで、他の英語の正確性に関する項目2つを見ていくことにする。それらは、正確な発音と文法を教える能力についてであり、それぞれ平均値は5.17, 5.15と大幅に低くなる。効率性に対し6を選んだ学生36名の中で、正確な発音に対しても6を選んだのは16名、正確な文法に対して6を選んだのは19名であり、それぞれ約半数になる。また、発音・文法両方に6を選択した学生は10名にまで減少する。このことから、発音や文法の正確性がコミュニケーションの効率性を担保するものである、と多くの学生たちが考えているわけではない、と言えるのかもしれない。

英語教育の中で多くの場合、賛否両論はあれど、英語の正確性とイコールで考えられるものはNSの言語能力である。そこで、ここから学生たちが彼らについてどのように考えているのかも見ていこう。まず始めに非常に興味深い点として、「ノンネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる」(平均値5.44, 最頻値6(28名))という項目が「ネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる」(5.39, 6(26名))という項目よりも、高い平均値を示したことである。しかし、その差は非常に小さく、わずか0.05であること、両方に6を付けた学生は21名で回答者全体の40%を占めたことから、一概に彼らがノンネイティブスピーカー(NNS)と意思疎通する能力の育成を、NSとのそれよりも重要視しているとは言い難い。しかし、ここでNNSとの意思疎通をより重視した学生が6名(約

12%) いたことには注意しておきたい。またこれと合わせて、「ネイティブスピーカーが用いる語彙や表現を教えることができる」という設問の平均値が14項目のうち最小(4.85)であり、唯一値が5を下回ったことも考えていきたい。この項目に対し、5または6を選んだ学生は35名(約67%)で2/3の学生がNSの語彙や表現の習得が大切だと思っている一方で、16名(約31%)が4「少し重要だ」を選んでいる。約1/3の学生はその重要性をそこまで高く見積もっていないことも分かる。NSの言語能力を模倣することが英語教育の目標となりがちな中で、学生たちのこのような傾向は何を意味しているのかを考えていく必要があるようだ。

最後に文化的興味育成に関する2項目、「英語圏の国々の文化に興味を持たせることができる」と「世界の様々な国の文化に興味を持たせることができる」について見ていこう。これらはそれぞれ平均値が5.14と5.10と平均値は他の項目と比べると低く、14項目の中では12位と13位である。このことから、全体として学生たちは文化的な興味育成は、スピーキングやリスニングなどの言語能力の育成と比べると、重要性が低いと捉えているのが分かる。また、この2項目で着目すべきは、その標準偏差の数値であろう。英語圏の文化に関しては0.96、多様な文化に関しては1.11と、他項目と比べると値が大きい。とりわけ後者は14項目のうち唯一1を上回る数値であり、意見が分かれた項目であると分かる。英語圏の文化に関しては、英語という言語との関連を見出しやすいが、他の文化については見出すことは難しいのかもしれない。または、文化的知識と言語能力を切り離して考えている学生も一定数いるのかもしれない。実際、両項目に対し2「重要でない」を選んだ学生もそれぞれ2名と4名いた。

4.3.2 英語観の特性と変化 — 入学直後のアンケートと比較して —

次に、上記の結果と先に示した昨年度のアンケート結果を照らし合わせながら、学生の英語観にどのような特性や変化が見られるのか考えていきたい。まず、口頭的・聴覚的能力についてであるが、昨年度のアンケートで多くの学生が「日本の英語教育はスピーキングとリスニングに力を入れるべきだ」という項目に対し「強くそう思う」(約41%)または「そう思う」(約44%)と回答していることを思い出したい。このことを考えてみると、学生たちは大学入学時から変わらずに、日本の英語教育では口頭的・聴覚的能力の育成が強調されるべきであると考え、現在はそれが将来教員になった自分たちにとって重要な使命であると認識しているようだ。この考えは、近年の英語教育でのコミュニケーション活動の重視と一致していると言えるだろう。その一方で、学生たちの中ではライティング・リーディングはコミュニケーション能力の重要な構成要素とはあまり考えられていないことは問題かもしれない。なぜならば、コミュニケーションの本質や言語の本質についての知識の欠如を示唆していると言え、今後これらについて深い学びが必要となると考えられよう。

次に、英語の正確性とコミュニケーションの効率性に対する認識について考えてみよう。昨年度のアンケートでは「私は英語をネイティブスピーカーのように発音したい」という項目は非常に高い平均値を示し、実に約70%の学生が「強くそう思う」と回答し、「そう思う」を選

んだ学生も約23%に上った。その一方で、今回のアンケートでは「正確な発音を教えることができる」という項目の「とても重要だ」は42%となり、発音の重要性に対する認識は下がっているかのように見える。当然ながら、NSのような発音と正確な発音を同等なものとして学生たちが捉えているかは分からないし、自己の英語に対する理想と将来の英語教員としての能力に対する認識が重なるものだとは言えない。しかしながら、発音に対する認識の柔軟性の高まりを、多少、示しているように見える。一方、文法に対しては大きな変化はなさそうである。先に述べたように、文法の正確性を教授する能力の重要性については平均値が5.17と5は超えたものの、他項目と比較すると低い。昨年度のアンケートでも、「いくら意味が通じても間違った文法は直されるべきだ」という質問は約71%の学生が「少しそう思う」または「あまりそう思わない」を選択していること、また「ちょっと変わった表現でも意味が分かれば問題ない」という質問に対しても同じく約71%が「強くそう思う」または「そう思う」を選択していることを併せて考えると、文法の正確性よりもコミュニケーションの効率性の方が、学生の認識の中では重要であるということには変わらないと言えるのかもしれない。

ここから文化的知識について考えてみよう。この範囲も入学時から変化が見られるところかもしれない。昨年度のアンケートでは「英語で国際コミュニケーションをとるためには英語圏の文化を知ることは重要である」という質問は約91%以上の学生が「強くそう思う」「そう思う」を選択している。今回のアンケートの「英語圏の国々の文化に興味を持たせることができる」という項目で「とても重要だ」「重要だ」と回答したのは、約79%となり、英語圏の文化の知識や興味が英語でのコミュニケーションに必須であるという考えから離れてきた学生が多少いるのかもしれない。これに関しては、もちろんその相関性はしっかりと調べられなくてはならないが、NNSとのコミュニケーション能力がNSとのそれよりも重要だとした学生が、数名であるものの、いたように、彼らの中でNNSの存在が重みを増してきたから、と言えるかもしれない。

最後にこれらの特性や変化を総合して、現在の英語観についてまとめてみよう。まず、聴覚的・口頭的能力はコミュニケーション能力の中核であり、英語教育においてはそれが重視されなくてはならない、と考えていると言える。次に、発音や文法に関しては、「正確」でなくとも、「NSのよう」でなくとも、コミュニケーションを大きく阻害するわけではない、と認識していると言える。文化的知識に関しては、以前よりも英語と英語圏文化の結びつきを強く考えているわけではないこと、より広い視野で英語という言語をとらえるようになってきている、と言えるのかもしれない。

(鈴木)

5 次年度研究の展開

本研究では、留学直前の学生の自己評価をとおして、本学部の英語教育学科における教員養

成課程で育成すべき能力や知識の抽出が部分的に達成できた。また、学生自身の能力の自己評価と、将来の教職へ向けてその学生が持っている意識との関連性もいくつか見出せた。今回の研究では、対象を留学直前の本学科の2年生の学生としたが、今後は、同じ学生の留学途中段階（例えば、9か月の留学の中間地点など）で同様の調査をし、能力や意識の変化を明らかにしたい。また、同様に、留学直後、教育実習の事前・事後、卒業時など、各地点で同じ調査を行うことにより、本学科の教職課程で学修をしていくことで、どのような能力や知識がより身についていき、また、あまり身につかないか、などを見出していくことができる。これにより、今後の英語教員に求められる英語力や英語指導力を確実に育成する教職課程のプログラムを構築することに資することになる。本研究の継続として、第3年目の共同研究を実施していきたい。（工藤）

本研究は玉川大学高橋貞雄名誉教授に月一回の研究会にご参加いただき、指導していただいた。

注

- 1) English Grammar の共通中間試験・期末試験は、あくまでも授業における試験であるため、学生の英文法の総合的な理解度・習熟度を測定する上では、外部標準テストなどと比べた時、一定の制約がある点には留意する必要がある。その一方で、英文法に焦点をあて、その運用能力とメタ言語的知識の両方の要素をバランスよく含む当該試験の結果は、少なくとも学生の英文法の理解度・習熟度の一端を示していると言え、ここでの分析により得られた結果は、その範囲において有効であると考えられる。

参考文献

- 金谷憲・太田洋・小菅敦子・日基滋之『英語力はどのように伸びてゆくか—中学生の英語習得過程を追う』大修館書店、2003
- 金谷憲・太田洋・小菅敦子・日基滋之「Input based vocabulary test (IVT) の開発」関東甲信越英語教育学会第28回東京大会自由研究発表資料、2004
- JACET (大学英語教育学会) SLA研究会「文法能力の習得と指導」『第二言語習得と英語科教育法』JACET (大学英語教育学会) SLA研究会、東京：開拓社、2013、180-191
- JACET (大学英語教育学会) 教育問題研究会 (編)『成長のための省察ツール言語教師のポートフォリオ【英語教師教育全編】』2014
- 鈴木彩子・工藤洋路・日基滋之・松本博文「英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み—初年次報告—」『論叢 玉川大学文学部紀要』第56号、2016、105-141
- 中央教育審議会 教育課程企画特別部会『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント』2016
- 東京学芸大学『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書』2016

- 日墓滋之・松本博文・高橋貞雄・鈴木彩子・小田眞幸・榎本正嗣・丹治めぐみ「大学入学前の文法の定着度に関する研究」『論叢 玉川大学文学部紀要』第53号, 2013, 31-58
- ベネッセ総合教育研究所『中高の英語指導に関する実態調査 2015』ベネッセホールディングス, 2016
- 望月正道「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『財団法人語学教育研究所紀要』第12号, 1998, 27-53
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店, 2003
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京：開隆堂出版, 2008
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』東京：開隆堂出版, 2010
- 文部科学省『第2期教育振興基本計画』2013
- 文部科学省「平成27年度 公立中学校・中等教育学校（前期課程）における英語教育実施状況調査」2015
- 文部科学省「平成27年度 公立高等学校・中等教育学校（後期課程）における英語教育実施状況調査」2015
- Nation, I. S. P. *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle and Heinle. 1990
- Nation, I. S. P. *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge. 2001
- Nation, I. S. P. *Teaching Vocabulary Strategies and Techniques*. Heinle. 2008
- Wesche, M. and Paribakht, T. S. Assessing second language vocabulary knowledge: depth versus breadth. *Canadian Modern Language Review*, 53, 1996. 13-40

資料

アンケート集計結果：質問1から14

次の事柄を、普段どのくらいの頻度で行っていますか？		よく 行う	時々 行う	たまに 行う	行わ ない	未回答
1	外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる。	3	12	25	12	0
		5.8%	23.1%	48.1%	23.1%	0.0%
2	英語の映画を見る。	9	19	17	6	1
		17.3%	36.5%	32.7%	11.5%	1.9%
3	英語教材を使って学習する。	14	20	15	3	0
		26.9%	38.5%	28.8%	5.8%	0.0%
4	テレビで英語のニュースや番組を見る。	1	11	16	23	1
		1.9%	21.2%	30.8%	44.2%	1.9%
5	英字新聞や英語の雑誌・本を読む。	2	12	25	13	0
		3.8%	23.1%	48.1%	25.0%	0.0%
6	英語のwebサイトを見る。	3	12	23	14	0
		5.8%	23.1%	44.2%	26.9%	0.0%
7	英語でメールのやりとりをする。	3	11	24	14	0
		5.8%	21.2%	46.2%	26.9%	0.0%

英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究と Can-do リスト作成の試み

8	英語関連の試験を受ける。	3	13	34	2	0
		5.8%	25.0%	65.4%	3.8%	0.0%
9	web などから携帯端末にダウンロードした教材や番組を視聴する。	0	12	15	25	0
		0.0%	23.1%	28.8%	48.1%	0.0%
10	英会話学校を利用する。	4	3	2	43	0
		7.7%	5.8%	3.8%	82.7%	0.0%
11	英語で日記をつける。	3	4	3	41	1
		5.8%	7.7%	5.8%	78.8%	1.9%
12	家族や友人と英語で会話をする。	4	5	18	25	0
		7.7%	9.6%	34.6%	48.1%	0.0%
13	英語の学習のために、音読をしている。	2	10	18	22	0
		3.8%	19.2%	34.6%	42.3%	0.0%
14	英語の学習のために、英文を書き写している。	3	9	11	29	0
		5.8%	17.3%	21.2%	55.8%	0.0%

アンケート集計結果：質問15から37

次の事柄はどのくらい当てはまりますか？		かなり当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	未回答
15	単語を学習するときに、理解できればよい単語と、自分で実際に使える単語とに区別して覚えようとしている。	6	17	21	8	0
		11.5%	32.7%	40.4%	15.4%	0.0%
16	話したり書いたりする際に、なるべく基本的な分かりやすい単語や表現を使うように意識している。	20	25	6	1	0
		38.5%	48.1%	11.5%	1.9%	0.0%
17	話したり書いたりする際に、自分が使っている英語の単語・表現や文法の間違いに気がついて	7	26	16	2	1
		13.5%	50.0%	30.8%	3.8%	1.9%
18	話したり書いたりした際に、自分が使った英語の単語・表現や文法についての間違いを自らで修正できる。	2	21	26	3	0
		3.8%	40.4%	50.0%	5.8%	0.0%
19	英語で話す際に、頭の中で日本語を英語に変換している。	9	28	14	1	0
		17.3%	53.8%	26.9%	1.9%	0.0%
20	英語で書く際に、一度日本語で文を作ってから、それを英語の文に変換している。	9	17	20	6	0
		17.3%	32.7%	38.5%	11.5%	0.0%

21	英語でプレゼンテーションをすることができる。	4	17	28	3	0
		7.7%	32.7%	53.8%	5.8%	0.0%
22	身近な内容であれば、即興で英語で話することができる。	5	24	16	7	0
		9.6%	46.2%	30.8%	13.5%	0.0%
23	英語でディベートやディスカッションをすることができる。	1	12	27	12	0
		1.9%	23.1%	51.9%	23.1%	0.0%
24	英語でパラグラフを書く際に、アウトラインを適切に作ってから、英文を書くことができる。	5	14	31	1	1
		9.6%	26.9%	59.6%	1.9%	1.9%
25	自分の英語力を向上させるために、何をすべきかを分かっている。	9	25	18	0	0
		17.3%	48.1%	34.6%	0.0%	0.0%
26	どんな辞書や参考書が自分の英語学習に役立つかを把握している。	6	22	22	2	0
		11.5%	42.3%	42.3%	3.8%	0.0%
27	現在、中学校の英語の授業を行うための全体的な英語力が備わっていると思う。	2	11	27	11	1
		3.8%	21.2%	51.9%	21.2%	1.9%
28	現在、高校の英語の授業を行うための全体的な英語力が備わっていると思う。	0	5	29	18	0
		0.0%	9.6%	55.8%	34.6%	0.0%
29	現在、中高の英語の教員として必要な英語の文法の知識が備わっていると思う。	0	5	33	14	0
		0.0%	9.6%	63.5%	26.9%	0.0%
30	現在、中高の英語の教員として必要な英語の発音のスキルが備わっていると思う。	1	8	27	16	0
		1.9%	15.4%	51.9%	30.8%	0.0%
31	現在、中高の英語の教員として必要な英単語を知っていると思う。	2	10	32	8	0
		3.8%	19.2%	61.5%	15.4%	0.0%
32	現在、中高の英語の教員として授業を行うための、全体的な指導力が身につけていると思う。	0	4	33	15	0
		0.0%	7.7%	63.5%	28.8%	0.0%
33	現在、中高の英語の教員として、生徒に英語学習についての適切な助言をすることができると思う。	0	12	30	10	0
		0.0%	23.1%	57.7%	19.2%	0.0%
34	将来、中学校の英語教員として働きたい。	16	18	11	7	0
		30.8%	34.6%	21.2%	13.5%	0.0%
35	将来、高校の英語教員として働きたい。	16	15	15	6	0
		30.8%	28.8%	28.8%	11.5%	0.0%
36	将来、小学校で英語を教えたい。	10	15	11	16	0
		19.2%	28.8%	21.2%	30.8%	0.0%
37	将来、英語を使って仕事をしたい。	36	15	1	0	0
		69.2%	28.8%	1.9%	0.0%	0.0%

アンケート集計結果：質問38から51

あなたが、将来、英語教員になったとき、次の事柄ができることは、どのくらい重要だと思いますか？		とても重要だ	重要だ	少し重要だ	あまり重要ではない	重要ではない	まったく重要ではない	未回答
38	ネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる。	26	19	6	0	0	0	1
		50.0%	36.5%	11.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%
39	ノンネイティブスピーカーと意思疎通が可能な英語力を育成することができる。	28	19	5	0	0	0	0
		53.8%	36.5%	9.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
40	自分の考えや感情を正確な英語で表現する力を育成することができる。	29	18	3	0	1	0	1
		55.8%	34.6%	5.8%	0.0%	1.9%	0.0%	1.9%
41	英語圏の国々の文化に興味を持たせることができる。	22	19	9	0	2	0	0
		42.3%	36.5%	17.3%	0.0%	3.8%	0.0%	0.0%
42	世界の様々な国の文化に興味を持たせることができる。	23	19	6	0	4	0	0
		44.2%	36.5%	11.5%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%
43	ネイティブスピーカーが用いる語彙や表現を教えることができる。	11	24	16	0	1	0	0
		21.2%	46.2%	30.8%	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%
44	リーディング力を育成することができる。	16	28	8	0	0	0	0
		30.8%	53.8%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
45	リスニング力を育成することができる。	32	19	0	0	0	0	1
		61.5%	36.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%
46	スピーキング力を育成することができる。	41	9	2	0	0	0	0
		78.8%	17.3%	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
47	ライティング力を育成することができる。	25	23	3	0	1	0	0
		48.1%	44.2%	5.8%	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%
48	コミュニケーション能力を育成することができる。	35	16	1	0	0	0	0
		67.3%	30.8%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
49	正確な文法を教えることができる。	21	19	12	0	0	0	0
		40.4%	36.5%	23.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
50	正確な発音を教えることができる。	22	22	6	0	2	0	0
		42.3%	42.3%	11.5%	0.0%	3.8%	0.0%	0.0%

51	英語に多少の間違ひはあつても、自分の考えや感情を効果的に表現する力を育成することができる。	36	13	3	0	0	0	0
		69.2%	25.0%	5.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

(くどう ようじ)

(すずき あやこ)

(ひだい しげゆき)

(まつもと ひろぶみ)

A Study of Competencies Student Teachers Need to Acquire in an English Teacher-Training Program: A Second Year Report

Yoji KUDO, Ayako SUZUKI,
Shigeyuki HIDAI, Hirobumi MATSUMOTO

Abstract

This paper is a report of collaborative research on competencies that student English teachers should acquire in their teacher-training program. The Department of English Language Education (DELE), the College of Humanities, Tamagawa University, was established in April 2015, and it has a specialized English teacher-training course. Our research is an attempt to specify competencies that student teachers need to develop in this course and make a Can-do list for them. This report focuses on the results of the questionnaire administered to the second-year students at English Language Teacher Education Course (ELT course) of DELE. The questionnaire was conducted a couple of weeks before they started studying abroad. The students were asked how proficient they were at English and how much they would think they could teach English at junior and senior high schools. The analysis and discussion of the results of the questionnaire will be expected to contribute to verifying and improving the current curriculum of ELT course.

Keywords: teacher-training program, curriculum, perceptions of English, teacher can-do, study-abroad